

Psychiatry and Clinical Neurosciences

Psychiatry and Clinical Neurosciences, 76 (3) は, Regular Article が 2 本掲載されている。国内の論文は著者による日本語抄録を, 海外の論文は PCN 編集委員会の監修による日本語抄録を紹介する。

Regular Article

Psychotropics use and occurrence of falls in hospitalized patients : A matched case-control study

C. Morishita*, M. Ichiki, A. Shimura, Y. Ishibashi, A. Inubuse, J. Masuya and T. Inoue

*1. Department of Psychiatry, Tokyo Medical University, Tokyo, 2. Department of Psychiatry, Maezawa Hospital, Tochigi, Japan

入院患者における向精神薬使用と転倒・転落発生に関する症例対照研究

【目的】複数の研究において向精神薬の使用は転倒・転落の危険因子である可能性が示唆されてきた。しかし, 以前の研究には, レセプト情報データベースを用いて収集されたデータを使用しており, 向精神薬使用と転倒・転落発生の時間的間隔が不明であるなどといった, 複数の限界があった。そこで, 本研究において, われわれは, 診療記録から収集された信頼性の高いデータを用い, 入院患者における向精神薬使用と転倒・転落発生との関連性を評価することとした。【方法】対象は東京医科大学病院の入院患者とし, 年齢, 性別, 診療科でマッチングを行い, 症例対照研究を実施した。新規使用者デザインを使用した。データの抽出には診療記録を用いた。アウトカムは転倒・転落とした。4 クラスの向精神薬 (抗精神病薬, 抗うつ薬, 抗不安薬, 睡眠薬) の使用について, 254 名の症例群 (転倒・転落

した患者群) と 254 名の対照群 (転倒・転落しなかった患者群) 間の比較を行った。多変量ロジスティック回帰分析を実施し, 4 クラスの向精神薬使用と転倒・転落発生との関連性を評価した。【結果】単変量解析においては, 全クラスの向精神薬使用が転倒・転落発生と有意に関連していた。さらに, 年齢, 性別, 診療科, body mass index, 入院時に記入された転倒・転落アセスメントスコアシートの合計点, および, 他のクラスの向精神薬使用といった交絡の可能性のある因子の調整が行われた多変量ロジスティック回帰モデルにおいても, 睡眠薬使用と転倒・転落発生との関連性は有意であった。【結論】本研究結果から, 入院患者において, 睡眠薬使用は転倒・転落の危険因子である可能性が示唆された。

Regular Article

Adjunctive berberine reduces antipsychotic-associated weight gain and metabolic syndrome in patients with schizophrenia : a randomized controlled trial

M. Chan*, Z. Qin*, S-C. Man, M. Lam, W. H. Lai, R. M. K. Ng, C. K. Lee, T. L. Wong, E. H. M. Lee, H. K. Wong, Y. Feng, L. Liu, F. Han, E. Y. H. Chen and Z-J. Zhang

*LKS Faculty of Medicine, The University of Hong Kong, Hong Kong, China

統合失調症患者におけるベルベリンの補助的投与は抗精神病薬に関連した体重増加およびメタボリック症候群を軽減する : 無作為化比較試験

【目的】本試験の目的は, 抗精神病薬に関連した体重増加およびメタボリック症候群の治療における補助薬としてのベルベリンの有効性および安全性を評価することであった。【方法】統合

失調症スペクトラム障害を有し、メタボリック症候群を発症した参加者 113 名を募集した。参加者を 12 週間のベルベリン群 (600 mg/d, n=58) またはプラセボ群 (n=55) に無作為に割り付けた。主要評価項目はベースラインから 12 週後の体重の変化 (正味体重増加量) とした。副次評価項目はボディマス指数 (body mass index : BMI), 胴囲, 血中グルコースおよび脂質プロファイル, 精神病症状の重症度とした。【結果】プラセボ群と比較すると, ベルベリン群では有意な体重増加の抑制が, 9 週目 (差の平均値 (MD) : -0.75, 95% CI : -1.42~-0.07 ($P=0.031$, $d=0.41$)) および 12 週目 (MD : -1.08, 95% CI : -1.76~-0.40 ($P=0.002$, $d=0.59$)) に認められた。また, ベ

ルベリンの投与を受けた患者では, BMI (MD : -0.41, 95% CI : -0.65~-0.17 ($P=0.001$, $d=0.64$)), 総コレステロール (MD : -0.58, 95% CI : -0.74~-0.41 ($P<0.001$, $d=1.31$)), 低比重リポ蛋白 (MD : -0.52, 95% CI : -0.68~-0.35 ($P<0.001$, $d=1.19$)), 糖化ヘモグロビン (MD : -0.09, 95% CI : -0.18~0 ($P=0.05$, $d=0.37$)) についてのエンドポイントでも統計学的に有意な改善を認めた。ベルベリンは良好な忍容性を示し, プラセボ群と比較して重大な有害事象や精神病症状の悪化を起こさなかった。【結論】本所見から, ベルベリンは抗精神病薬に関連した体重増加およびメタボリック症候群の軽減に有効であることが示唆される。

中道の描くモチーフは静物が中心だ。マニキュアの瓶のような小さめのものから、花や野菜といった静物画に伝統的なものもある。目立つのは、電子ピアノ、電子レンジ、扇風機といった家庭用電化製品だ。

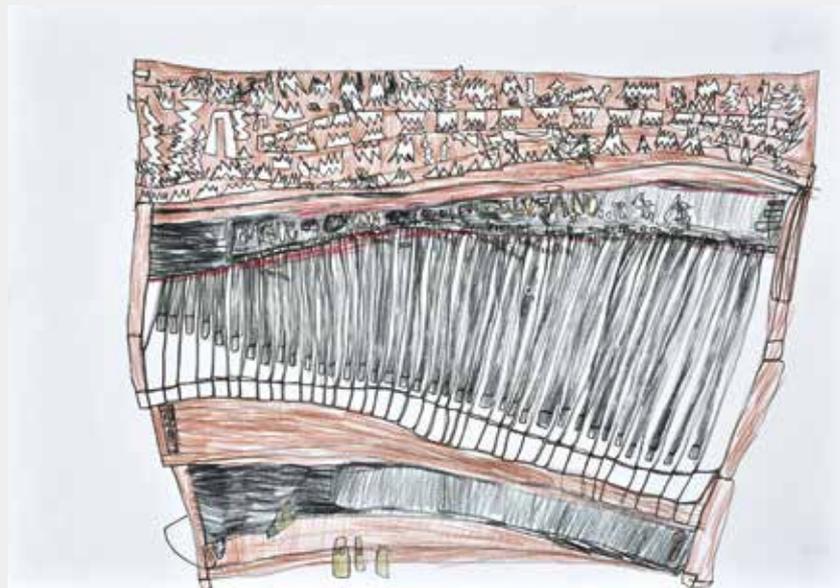
彼の絵の特徴は、歪みと模様と文字である。たとえばPCのキーボードや電子ピアノといったような、直線が基調の細かいパーツが整然と並んでいるものも、彼の手にかかると、そのなかに大きなうねりをもつことになる。でもなぜかそれがいびつにも稚拙にも見えてくることがないのは、全体の特徴をその絵がよく捉えているからだろう。

また彼は、対象に見えているなにかを、いわば模様化する。その模様は、対象の全体を覆うことはほとんどない。それはおそらく対象に見えた光の反射なのだろうと予測されるが、判然とはしない。ひょっとしたら、光の反射によって見えてきた微細な傷かもしれない。

そして文字。興味深いのは、単語の始まりの文字、つまり左側の文字は読めるものの、右にいくにしたがって殴り書きになっていくのが多いことだ。また、文字の量が多いと、限られたスペースに無理やり収められた結果、ぐじゃぐじゃの線の集積となることもあるし、単語が物体の輪郭を飛び越えて、文字が空中に浮いてしまうこともある。

中道が描くと、家電製品のような大量生産品も個性をもったなにもものかとなる。その変化を、擬人化の手法をとることなく成功させている彼の絵は、ひょっとしたら、そうした製品に囲まれた現代の生活を肯定する新しいアートとして理解できるのかもしれない。

保坂健二郎（滋賀県立美術館）



タイトル：電子ピアノ

作者：中道一輝（NAKAMICHI Kazuki）

制作年：2015

素材：色鉛筆，ペン，紙

サイズ：382×542 mm